

北の海鳥

十七号



『北の海鳥』十七号
令和5年12月20日
北海道海鳥保全研究会
稚内市緑5-27-8



ハイイロウミツバメ 2022年11月13日 宗谷岬 三ツ橋圭

目次

| | | |
|--|--------|----|
| 1. 北海道周辺の海鳥繁殖地 | | |
| ・津軽海峡のウトウ繁殖地での調査記録 | 伊藤 元裕 | 2 |
| ・北海道大黒島におけるケイマフリ繁殖の可能性と 2023年の海鳥センサス結果 | 大門 純平 | 8 |
| 2. 北海道沖の海鳥 | | |
| ・夏から秋の八苦航路2 ～コシジロアジサシの渡り | 先崎 理之 | 14 |
| 3. 海鳥情報 | | |
| ・大荒れの宗谷岬 | 三ツ橋薫・圭 | 18 |
| ・群れるヒメウ | 長谷部 真 | 22 |
| ・釧路市における海鳥類の観察記録④ アジサシ類、トウゾクカモメ類、ウミスズメ類 | 矢萩 樹 | 26 |

1. 北海道周辺の海鳥繁殖地

津軽海峡のウトウ繁殖地での調査記録
東洋大学生命科学部 伊藤元裕

ウトウは、環太平洋北部地域に広く分布し、北海道の天売島を世界最大の繁殖地とする潜水性のウミスズメ科鳥類です。これまで日本のウトウの生態調査・研究は、天売島をはじめ北海道の島でのものがほとんどでしたが、本州にも東北地域に本種の小規模な繁殖地が点在していることが知られています。特に青森県では、大間町の弁天島とむつ市の鯛島がその繁殖地として知られる他、青森市の市の鳥がウトウであったり、善知鳥（ウトウ）神社があったり、「田酒」で有名な西田酒造の限定大吟醸に「善知鳥」があったりと文化的にも善知鳥・ウトウとのつながりが深く、古くから周辺地域の人々に身近な海鳥であったことが伺えます（写真1、図1）。また、これら東北のウトウ個体群は、対馬暖流、津軽暖流、親潮、黒潮が複雑に相互作用する海域で採餌し繁殖すること、極東の繁殖南限個体群であることから、海洋生態学的見地からも非常に興味深い研究対象であると言えます。



写真1 青森市善知鳥神社の御朱印帳とお守り

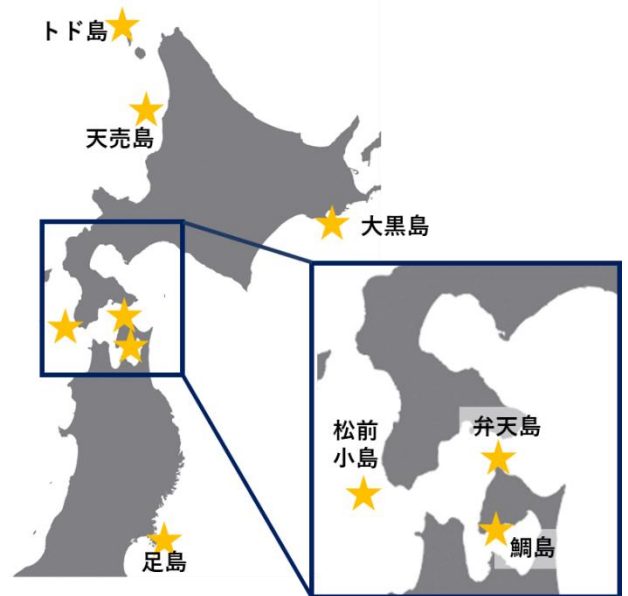


図1 津軽海峡周辺と日本全国のウトウの繁殖地

筆者が2013年と2015年の7月に大間町の弁天島とむつ市の鯛島で実施したウトウの予備調査記録を2016年に本誌2号に寄稿してから早7年が経過しました。2017年から筆者は所属を東洋大学生命科学部に移し、念願叶って学生とともにこれらの津軽海峡の島々で本調査（特に、繁殖数、採餌域、餌、雛の栄養状態等に注目）を2019年から開始し、現在も継続しています。前回の寄稿時（北の海鳥2号、2016年）に、「まずは繁殖数の正確な推定調査を行うとともに、北海道個体群との遺伝的な距離や津軽暖流の変動など海洋環境と繁殖成績との関係、越冬場所の解明など様々な謎に迫っていかれたらと考えています。」と書いてあったことを久しぶりに今回確認しましたが、これらのいくつかはやっと一定の成果が近年見えてきました。今回は、この調査や成果について本稿にて簡単にご紹介させていただきたいと思ひます。

大間町弁天島の繁殖調査

弁天島は、大間崎の沖約 600m の津軽海峡上にある周囲約 2.7 km の無人島です(地図 1、写真2)。主にウミネコの大繁殖地と知られている他、オオセグロカモメも少数繁殖しています。島は、多くがイタドリ群生地となっている他、一部に裸地と笹や、ヨモギ、エゾニュウ、ギシギシ、イネ科の植物等が生えています。↘



写真2 弁天島、多数のウミネコが舞う

我々は、2019年に弁天島全域での踏査を行い、巣の全数カウントを実施しました。その結果、ウトウの繁殖地は、島の北西側と南西側の海側においてヨモギ、エゾニュウ、イネ科の植物が群生する一部の範囲で発見することができました(写真3)。一部、島の中心部にある灯台脇の斜面においても巣穴が発見されましたが、こちらは穴が浅く、使われた形跡はいずれもありませんでした。灯台周辺の高台は石が多く増巢に不向きだったのかもしれませんが。巣のカウントの結果、約 150 巣(論文投稿中)が確

認されました。この数は、2013年以前に概算された巣数とほぼ一致しており、過去10年で大きな増減は見られなかったことを示唆しています。繁殖地では、2019年、2021年、2022年、2023年と連続して夜間に餌を持ったウトウの帰巢が観察された他、雛の存在も確認され小規模ながらウトウが継続的に繁殖していることが明らかとなりました。



写真3 弁天島のウトウの巣

鯛島(地図1、写真4)は、むつ市脇野沢の牛ノ首岬の沖約 800m の陸奥湾内にある周囲約 0.4km 無人島です。島は、主に海拔 25mほどの切り立った岩からできており、その上部に土壌が存在し、ハマニク、ノガリヤス、ヨモギ、低木が見られます。2021年にウトウの巣全数カウントの結果、ウトウの巣は、島内の土壌が存在する場所にはおおよそ全てに存在しており、巣の分布密度も高く、全島で約 1100 巣(論文投稿中)が確認されました。2015年に私が入島時に概算した巣数は 500→800 巣でした(*北の海鳥 2号、2016年の報告で誤植があました。鯛島のウトウの巣数を約 150 巣と記載しておりましたが、これは弁天島のデータを誤記載したものでした。本稿において、2015年の概算巣数の記載を 500→800 巣と訂

正しいとします)。2015年の入島時間は短く、巣数の概算は非常に簡易なものであったため、2021年の巣数とは正確に比較できませんが、観察した巣の分布範囲や密度に大きな違いは見られないことから、この数年間の巣数の変動は微増か変化していないと言えそうです。巣数の多さのためか、夜間の帰巣数も弁天島よりも多く、雛も多数発見することが出来ました。さらに、島には、ウミネコ、オオセグロカモメが多数営巣していました。特にオオセグロカモメの繁殖地とウトウの繁殖地は大きく重なっていましたが、少なくとも調査期間中、天売島とは異なり、カモメ類がウトウの雛や親鳥を襲う姿は観察されませんでした。

の餌に占めるカタクチイワシの割合が激減し、繁殖成績が大幅に低下したことが報告されています (Watanuki et al 2022)。こうした中、津軽海峡の2島においては、少なくとも2021年からカタクチイワシが急増し主要な餌となっており、雛の成長も非常に高いレベルを保っていたことが明らかになりました。採餌域は、陸奥湾から津軽海峡の極沿岸域、また太平洋の沿岸域であることが確認され、これらの海域にカタクチイワシが戻ってきていることを示しました (写真5、この詳細については日本鳥学会 2023 年度大会等の学会で発表していますのでそちらをご参照ください)。



写真4 鯛島全景と繁殖地の様子



写真5 カタクチイワシを運ぶウトウとGPS ロガーの装着

ウトウの餌と採餌域

2019年からこれらの島々で、GPS ロガーを用いたウトウ親鳥の追跡 (写真5) と餌調査、雛の成長調査も実施しています。北海道天売島においては、2014年から雛

環太平洋地域のウトウ個体群の遺伝的多様性に関する研究

さらに近年、津軽海峡のウトウに関するデータは世界的な共同研究にも活用されて

います。環太平洋北部地域全域に生息するウトウの遺伝的多様性に関する研究において、極東個体群の北海道天売島、礼文海驢（トド）島、大黒島、松前小島とともに、鯛島のサンプルが提供され、大がかりな共同研究が実施されました。その結果、極東個体群と北米個体群には特に大きな（亜種レベルともいえる?!）遺伝的変異が確認されるに至りました（Abott et al. 2014, Hipfner et al 2020）。また日本国内の個体群間にも微妙な差異が見られる可能性が残されており（特に東北個体群のサンプルの追加が望まれる）、今後も遺伝的変異に加えて、形態や行動について比較する共同研究が世界規模で推進される予定です。

ウトウ調査の思わぬ副産物

2019年に弁天島において、ウトウの繁殖調査を行っていた際、偶然ウトウの繁殖地に隣接する草むら（ヨモギ、エゾニュウ、ギンギン）の中で、マガモの巣を1巣発見しました（写真6）。調べてみると、青森県でマガモが繁殖した記録はこれまでにはなく、これが青森県での繁殖初記録報告となりました（平田ら 2021）。その後2021年にも、再度前回とほぼ同じ場所において巣を発見し、マガモの継続的な繁殖が確認できました（小澤ら 2023）。このような予期しない発見も新しい継続調査をしているとたまに起こる楽しいイベントです。



写真6 マガモの巣

結びと今後

2013、2015年から細々と開始した津軽海峡周辺でのウトウ調査は、10年弱を経過し、徐々に実を結び始めています。しかし、まだまだ分からないことだらけです。今後は、貴重な繁殖地への調査の悪影響を最小限にとどめる努力を最大限に行いながら、さらに長期にわたりモニタリングを継続し、津軽海峡のウトウについて調査を進め、その成果を随時公表していければと考えています。さらに、2022年からは、本稿でご紹介した青森県の2島においてウミネコとオオセグロカモメの調査を開始しました。また、津軽海峡の入り口に位置する北海道松前町の松前小島（地図1）においてもウトウの調査を2017年以来徐々に開始しました。松前小島では、2024年にウミネコ調査も実施する予定です。また新たな発見があることを期待しています。

最後になりますが、これらの、青森県、むつ市、大間町、各漁協、下北野鳥の会の方々、弘前大学の方々のご厚意とご協力のもと進めることが出来ております。この場をお借りして深く感謝いたします。また、昨年末に急逝された脇野沢の船頭、田中国広さんには、生前の暖かなご協力に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

引用文献

- 小澤光莉, 大島康平, 平田和彦, 伊藤元裕 (2023) 青森県におけるマガモ *Anas platyrhynchos* の継続的繁殖：大間町弁天島における繁殖追加記録. 青森自然誌 研究 28 1-4
- Watanuki Y, Yamamoto M, Okado J, Ito M, Sydeman W (2022) Seabird reproductive responses to changing climate and prey communities are mediated by prey. *packaging*. MEPS 683 179-194.

平田和彦, 小澤光莉, 田上陸, 伊藤元裕
(2021) 青森県におけるマガモ *Anas platyrhynchos* の繁殖記録: 大間弁天島における抱卵と孵化の状況証拠. 青森自然誌研究 (26)4-5.

Hipfner JM, Prill MM, Studholme KR, Domalik AD, Tucker S, Jardine C et al. (2020) Geolocator tagging links distributions in the non-breeding season to population genetic

structure in a sentinel North Pacific seabird. PloS one 15(11) e0240056.

Abbott CL, Millikin RL, Hipfner MJ, Hatch S, Ito M, Watanuki Y et al. (2014) Genetic structure of rhinoceros auklets, *Cerorhinca monocerata*, breeding in British Columbia, Alaska, and Japan. Mar. Biol. 161(2) 275-283.

北海道大黒島におけるケイマフリ繁殖の可能性と2023年の海鳥センサス結果
大門純平(水産研究・教育機構
水産資源研究所さけます部門)

はじめに

ケイマフリ *Cepphus carbo* は、アジア極東域に限定して分布するウミスズメ科で、パンダのような白い目元、赤い足といった愛らしい見た目が特徴です(図1)。国内におけるケイマフリの繁殖状況をまとめた論文によると、かつては北海道と青森県および岩手県周辺の沿岸の28カ所で繁殖が確認されていましたが、2011-2014年の調査で繁殖が確認されたのは14カ所の

みであり(図2)、個体数は多くの繁殖地で減少傾向とされています(Senzaki et al. 2015)。このような状況もあり、本種は環境省レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。



図1 ケイマフリ (長谷部真 撮影)

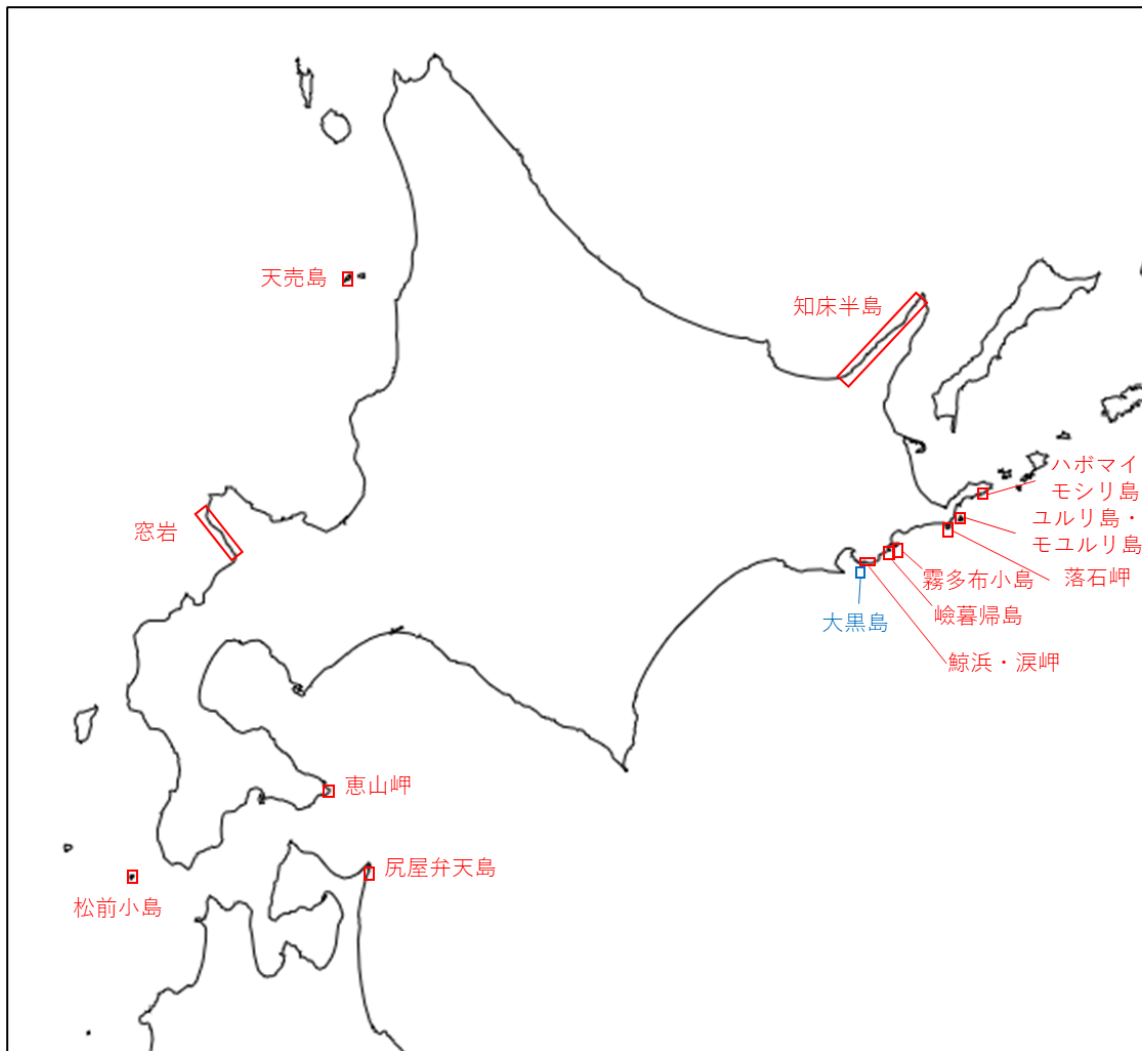


図2 2011-2014年の調査でケイマフリの繁殖が確認された場所(赤)と大黒島(青)の位置。Senzaki et al. (2015) を改変

北海道東部の厚岸町にある大黒島は、コシジロウミツバメ *Hydrobates leucorhous* など複数の海鳥の繁殖地ですが、かつては多くのケイマフリが生息し、繁殖も確認されていました（表 1、図 2）。たとえば、1951 年には 168 個体、1972 年や 1982 年にも数十個体が観察

されており、少なくとも 1982 年には 50 個体前後が繁殖していたという記述があります。しかし、1980 年代後半以降では多くて数個体が確認されるのみで、1993-1994 年のように全く観察されなかった年もあるほか、繁殖に関する記録も 1990 年を最後に途切れていました。

表 1. 大黒島におけるケイマフリの生息記録。元文献が手に入らなかった場合、引用先の文献（元文献）として記載し、元文献は引用文献リストには載せていない。* 繁殖個体数 50 個体前後という記述より推定。時期は月の前半（E）もしくは後半（L）を示す。

| 年 | 時期 | 個体数 | つがい数 | 繁殖に関する記述 | 文献 |
|--------|-------|--------|------|---------------------|--|
| 1951 | 6L | 168 | | | Fennell 1953 |
| 1972 | 7E | 41-100 | | 繁殖（岩の隙間に飛び込む） | 阿部ら 1972 |
| 1980 | - | 1 | | | 林田・橋本 1981 |
| 1982 | - | 80 | 25* | 繁殖 | 綿貫ら 1988; 新妻 1995 |
| ~1984? | - | - | | 繁殖 | 海鳥コロニーデータベース（Hasegawa 1984; 長谷川ら 1984） |
| 1986 | - | 1 | | | 綿貫ら 1988 |
| 1990 | - | - | | 繁殖 | 海鳥コロニーデータベース（小城・岡 1996）; Osa & Watanuki 2002（近藤ら 1991） |
| 1993 | 6L | 0 | | | 新妻 1995 |
| 1994 | 6E | 0 | | | 新妻 1995 |
| 1996 | - | 1 | | | Osa & Watanuki 2002（中村ら 1997） |
| 1997 | - | 6 | | | Osa & Watanuki 2002（佐藤 1998） |
| 2006 | 7E | 1 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2007 |
| 2009 | 6L-7E | 7 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2010 |
| 2012 | 6L-7E | 3 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2013 |
| 2015 | 6L-7E | 3 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2016 |
| 2017 | 7E | 1 | | | 大門ら 2019 |
| 2018 | 7E | 1-3 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2019; 大門ら 2019 |
| 2021 | 7E | ≥1 | | | 環境省自然環境局生物多様性センター 2022 |
| 2023 | 6L | 10 | | 繁殖の可能性あり（岩の隙間に飛び込む） | 本報告 |

私は、2023年6月29日から7月5日に大黒島で行った調査で、ケイマフリの繁殖を示唆する行動を観察しました。今回は、その状況を報告させていただきます。また、同時に実施した他の海鳥センサスの結果についても簡単に記載します。

ケイマフリの観察

2023年6月29日に北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所の船「うみあいさ」で大黒島のまわりの海上をゆっくり走行し、崖で営巣している海鳥を観察しました。その際に、島の北東の海上で10個体のケイマフリが着水しているのを発見し、そのうちの1個体が飛び立って近くの崖に降り立ち、崖の隙間に入っていくのを観察しました(図3)。崖に飛び込んだ個体を含め、餌をくわえている

ケイマフリはいませんでした。ケイマフリ繁殖状況調査の方法によると、成鳥が何もなくわえすがけの隙間に飛び込む場合は、繁殖の可能性があると考えられています(長谷部・先崎 2013)。餌を持った個体を観察できませんでしたが、今回の観察結果から本島でケイマフリが再繁殖している可能性が示唆されました。大黒島では、島周辺で着水するケイマフリが定期的に観察されていますが、このような繁殖を示唆する観察は1990年以来33年ぶりとなります。今年は、繁殖を示唆する行動に加え、近年で最も多くの個体も観察されました(10個体、表1)。今回の観察は、ささやかではありますが、大黒島でのケイマフリの分布状況が好転している可能性を示す知見になると考えています。



図3. 2023年の大黒島でケイマフリやヒメウを確認した場所とウミウ、ウミネコ、オオセグロカモメの営巣地

海鳥の繁殖状況

上述の海上センサスの観察をベースに、大黒島におけるウミウ *Phalacrocorax capillatus*、ウミネコ *Larus crassirostris*、オオセグロカモメ *L. schistisagus* の繁殖状況について、島を踏査しながら 2023年7月1日、7月3日、7月5日に調べました。ウミウは240巣（空巣を含まない巣数）を確認しました（図3）。近年の大黒島におけるウミウの巣数はおおむね200巣前後で推移しており、今年の営巣数は例年とほぼ同等といえます（大門ら2019、環境省自然環境局生物多様性センター2022）。ただ、2021年の調査では島の南側に集中していたコロニーが、2023年には東側に集中して見られました。オオセグロカモメは13巣を確認しました（図3）。踏査できていない場所での見逃しなども考慮すると、島全体では30巣程度と推測します。こちらも、近年と変わりません。ウミネコのコロニーは、島の中西側と中央部の2つがあり、2017-2021年に確認されていた北部のコロニーはなくなっていました（図3）。両コロニーで合計9巣を確認しましたが、コロニーをゆっくり調べる時間がなかったため見逃しが結構あると思います。印象的には120巣くらいはありそうでした。また、6月29日の海上センサスの間にヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* が飛翔しているのを目撃しました（図3）。滞在中は、オジロワシ *Haliaeetus albicilla* の成鳥、亜成鳥が島東部の沿岸や島西部を飛翔しているのをしばしば観察しました。最大同時観察数は2個体でした。これまでの調査から、おそらく1つがいのオジロワシが大黒島を継続的に利用している、と考えられています（大門2021）。しかし、調査時期がオジロワシの育雛時期よりも少し遅かったこともあり、今年の調査では巣を確認す

ることはできませんでした。滞在中にオジロワシがウミネコのコロニーに飛来して、攪乱したり、親に襲い掛かっている様子を何度か確認しました。また、オジロワシによると思われる捕食痕をウトウ *Cerorhinca monocerata* の成鳥1個体、ウミウの雛1個体、ウミネコの成鳥2個体および雛1個体で確認しました。島南部のオオセグロカモメのコロニーでは、オジロワシによる攪乱がよく確認されていましたが（大門2021）、今年は観察されませんでした。

終わりに

海上センサス中は、海鳥を観察しやすいようにゆっくりと船を動かしていただいていた。しかし、独特のうねりとゆれの中で私は徐々に胸のムカムカを感じていました。波間にプカプカと浮かぶケイマフリを見つけたのは、ウミウを横目に「コマセ」を数回まいたあとだったでしょうか。あ、ケイマフリ…と思った瞬間、一羽が飛び立って、岩の隙間に飛び込みました。あれ、ケイマフリって大黒島ではしばらく繁殖が記録されてなかったんじゃ…??とハッとしました。その驚きであっという間に酔いがさめた…とはいきませんでした。が、「フィフィフィフィ…！」という美しい声を聴きながらうれしい気持ちになったのを覚えています。

謝辞

調査を行うにあたって、水産研究・教育機構水産資源研究所の佐藤俊平グループ長をはじめとした皆様、筑波大学の庄子晶子准教授、鈴木龍晟さん、氏家太さん、松本和也さんをはじめとした行動生態学研究室の皆様、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所の仲岡雅裕所長、濱野章一さんをはじめとした皆様、東

京農業大学の菊地デイル万次郎助教に大変お世話になりました。本報告にかかる調査は、文化庁、厚岸町海事記念館の許可を受けて実施しました。北海道海鳥保全研究会の長谷部真さん、先崎理之さん、矢萩樹さんには原稿に貴重なコメントをいただきました。お世話になった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

引用文献

- 阿部學・市田則孝・清水雅男・橋本正雄・柚木 修・小沢典夫・小沢重雄（1972）コシジロウミツバメの営巣個体数推定の試み，と動物相一北海道大黒島一．鳥 21: 346-365.
- Fennell (1953) Notes on the birds of Daikokujima, Hokkaido, Japan. *Condor* 55: 38-42.
- 長谷部真・先崎理之 (2013) ケイマフリ繁殖地における調査の手引き（天売島を例に）. 北海道海鳥保全研究会 web 公開資料 https://a9a854f0-bb5f-48d9a632b0a427d286b6.filesusr.com/ugd/76f137_cfbfd1aa6cec747208af55323e9ed0c23.pdf (2023年10月10日アクセス).
- 林田恒夫・橋本正雄（1981）大黒島の鳥獣類．釧路市立郷土博物館（編）大黒島及びその周辺の科学調査報告書：31-34．釧路市立郷土博物館，釧路．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2007）平成18年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書．環境省，東京．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2010）平成21年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書．環境省，山梨．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2013）平成24年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書．環境省，山梨．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2016）平成27年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書．環境省，山梨．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2019）平成30年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書．環境省，山梨．
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2022）2021年度モニタリングサイト1000小島嶼（海鳥）調査報告書．環境省，山梨．
- 新妻靖章（1995）大黒島のコシジロウミツバメとオオセグロカモメに繁殖ペア数について．釧路市立博物館記要 19: 15-18.
- 大門純平・伊藤元裕・綿貫 豊（2019）北海道大黒島における海鳥の現状．山階鳥学誌 51: 95-104
- 大門純平（2021）北海道大黒島で観察されたオジロワシの海鳥に対する干渉・捕食．北の海鳥 13: 22-24.
- Osa Y & Watanuki Y (2002) Status of seabirds breeding in Hokkaido. *J Yamashina Inst Ornithol* 33: 107-141.
- Senzaki M, Hasebe M, Kataoka Y, Fukuda Y, Nishizawa B & Watanuki Y (2015) Status of the Spectacled Guillemot (*Cepphus carbo*) in Japan. *Waterbirds* 38: 184-190.
- 海鳥コロニーデータベース <https://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/index.php> (2023年10月10日アクセス)
- 綿貫 豊・近藤憲久・中川 元（1988）北海道周辺における海鳥繁殖地の現状．日鳥学誌 37: 17-32.

2.北海道沖の海鳥

夏から秋の八苦航路2

～コシジロアジサシの渡り

先崎理之（当会事務局長）

はじめに

青森県の八戸と苫小牧を結ぶ通称“八苦航路”の海鳥シリーズは今回が2回目です。前回は海水温が高い時に見られた熱帯性海鳥の話について紹介しました。今回は八苦航路で見られるコシジロアジサシに関するエピソードを紹介したいと思います。

迷鳥だったコシジロアジサシ

コシジロアジサシはサハリン島を含む極東ロシアの高緯度地方からアラスカにかけて繁殖するアジサシ類です。見た目はアジサシによく似ていますが、成鳥では白い眉斑があることなどで、幼鳥では上面が濃褐色であることで見分けられます。

本種はかつて非繁殖期もあまり南下しないと考えられており、日本での観察記録も数例しかありませんでした。そのため、古参バーダーの中には本種を迷鳥とみなす方もそれなりにいるのではないかと思います。しかし、ここ20年ほどの間に、本種は非繁殖期には東南アジア周辺海域まで南下すること、渡りの際には太平洋・日本海を含む日本近海を通過していることがトラッキングの研究から明らかになりました。また、野外でも時期と海域、気象条件が合致すれば簡単ではないものの日本近海でもそれなりに普通に見られることが明らかになり、もはや迷鳥の域を脱した感がある種類です（写真1、北の海鳥16号の城石さんの記事も参照）。



写真1 襟裳岬沖のコシジロアジサシ（2012年9月23日）。調査船から観察した。襟裳岬以東の北海道太平洋側沿岸では本種は普通に見られる。私の限られた経験では、大群は観察していないが日によってはアジサシよりも多いことがあった。

季節と気象条件が観察の鍵

そんなコシジロアジサシですが、八苦航路でも以下の条件さえ合致すれば狙って見られる種類です。

第一に重要なのは季節です。本種が八苦航路上の海域に良く現れるのは、越冬地へ南下する個体が津軽海峡周辺を通過する秋の渡りの時期です。春の渡りの時期にも観察したことがありますが（2021年5月29日4羽）、私自身は観察の試行回数が少なくどの程度普通に観察できるのかはまだわかっていません。話を秋に戻しますが、2021年以降の7～9月に私が八苦航路に乗船した12回（7月6回、8月4回、9月2回）のうち、コシジロアジサシは5回見られました（表1）。

表1 7~9月のコシジロアジサシの観察数。「出発・到着地（出港時刻）」欄の“八→苫”は八戸発苫小牧行き、“苫→八”は苫小牧発八戸行きを指す。2020年秋から異なる海況に応じて海鳥の出現状況が変わるのかを調べるために八苫航路に乗船した際のデータを示す。8:45分発の八戸発のフェリーに乗船した日の多くは、前日23:59苫小牧発のフェリーに乗船して観察しているが、日の出が尻屋崎沖となるため今回のデータには含めていない。

| 日付 | 出発・到着地 (出港時刻) | コシジロ アジサシ 観察数 |
|-----------|------------------|---------------------|
| 2020/7/19 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2020/7/24 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2020/8/30 | 苫→八 (9:30~) | 7 |
| 2020/8/31 | 八→苫 (8:45~) | 30 |
| 2020/9/12 | 苫→八 (9:30~) | 9 |
| 2020/9/13 | 八→苫 (8:45~) | 3 |
| 2021/7/5 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2021/7/24 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2021/7/28 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2021/8/6 | 八→苫 (8:45~) | 0 |
| 2021/8/9 | 八→苫 (8:45~) | 33 |
| 2023/7/24 | 八→苫 (8:45~) | 0 |

今回の観察で、最も早くに本種が見られたのは2021年8月9日で、7月には一度も見られませんでした。そのため、本種がこの海域に現れるのは早くても8月に入ってからと思われます。また、最も遅くに見られたのは2020年9月13日でした。しかし、今回の一連の観察ではこれより遅い時期には乗船しておらず、また、尻屋崎沖、苫小牧沖、室蘭沖における小型船からの観察や苫小牧や八雲町の陸地からの観察では9月末まで本種がコンスタントに出現

しています。そのため、この海域における本種の渡り時期は少なくとも9月いっぱいくらいまでは続くものと思われます。ただ、今回の乗船では8~9月に限って言えば6回中5回見られているので、やはり本種はそれほど珍しくない種類であることが伺えます。

第二に重要なのは気象条件です。一連の乗船で本種を確認できた日は基本的にはどんより曇っているか時折雨が混じるような天候で、海面に白波が立つくらいには強い風が吹いていました。特に近海を低気圧が通過し、強かった風が段々と弱まってくるタイミングで八戸から苫小牧に向かうフェリーに乗船できた日には、津軽海峡から苫小牧沖にかけての海域で、西から東に向かって飛翔する単独から数羽の本種を次々と確認出来ました（2020年8月31日30羽、2021年8月9日33羽）。実のところフェリーから観察するアジサシ類は距離が遠いことが多く、識別にはいつも頭を悩ませますが、こうした日には双眼鏡で特徴を十分に確認できる距離を飛んでくれる個体が多いので、識別難易度が一気に下がります（写真2、写真3）。



写真2 恵山沖のコシジロアジサシ成鳥（2021年8月9日）。この日は津軽海峡を越えたあたりから次々と現れた。西から東に向かって飛ぶアジサシ類は、飛翔方向に北に向かって進むフェリーが近づくと北東から北に向きを変え、船首を超えるとまた東に向かっていく。

幼鳥が見やすい

さて、八苦航路でのコシジロアジサシを語るうえで外せないポイントが実はもう一つあります。それは、八苦航路では本種の幼鳥がコンスタントに出現するという点です。実際、上記の本種が出現した5回の乗船では成鳥だけでなく、幼鳥を確認できました。本種の幼鳥はどういうわけか北海道以南ではほとんど記録がなく、国内で見たいなら北海道近海でチャレンジする必要があります。どこかの海域で小型船をチャーターするか、気象条件の整った日に陸からチャレンジするといった選択肢もありますが、これらは実現のハードルが高いため、今回のデータからも八苦航路への乗船がその観察への第一候補の一つになることが裏付けられました。もちろん似た海域を通過する大洗苦小牧航路でも観察可能性は同じですが、八苦航路の方がフェリーの船速が遅く、海面までの距離が近いという点では分があります。

なお、本種の幼鳥は、単独で出現することもあります。たいていは1~2羽の成鳥と共に出現します。親子の可能性がありますが、裏付けられてはいません。フェリーのデッキから聞ける機会はめったにありませんが、しばしば「チュリリー」という鋭い声を発するため、この声でその存在に気が付くこともあります（写真3）。



写真3 恵山沖のコシジロアジサシ幼鳥（2021年8月9日）。成鳥1羽と飛んでいた。この個体は盛んに鳴いており、フェリーの上からでも微かに声が聞こえた。

3.海鳥情報

大荒れの宗谷岬 ミツ橋薫・圭
(北海道海鳥センター友の会)

日本国内におけるアカアシミツユビカモメの観察記録は太平洋側での少数の記録を除くとオホーツク地方東部に集中しており、日本海側はもとより道北オホーツク海側での記録もほとんど聞いたことがなく、海からの強風(15m/sを超えるような)などの気象条件が整えば宗谷岬周辺でも見ることができるのではないかと個人的に興味のあるところでした。2022年11月13日(日)は、我々のような休日バードウォッチャーがこれを検証しうるまたとないチャンスでした(図1)。

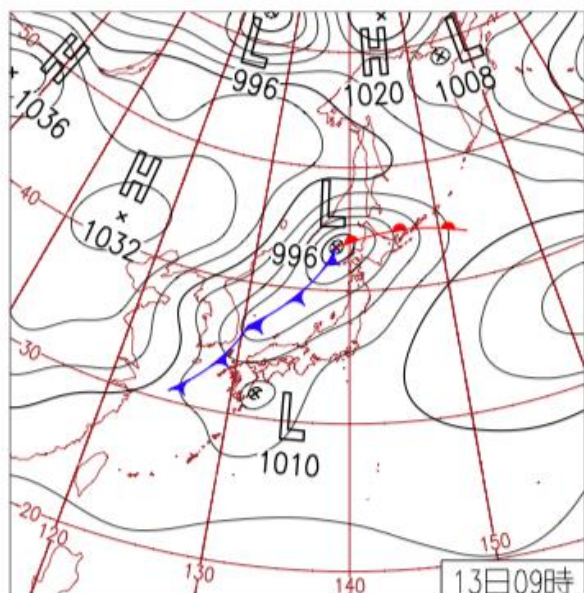


図1 気象庁「日々の天気図 No.250
2022年11月」より抜粋

当日、宗谷岬に向かう道中の風はそれほど強くなく、風が足りない可能性に多少不安になりましたが、朝10時頃、宗谷岬の駐車場(図2)に着き車内から海を眺めると、岸よりにオオセグロカモメとウミネコ、そして200mくらい沖にはミツユビカモメの群が東から西へと飛びかっっており、安堵しました。さらに沖の海岸から500mほどのラインに目を向けると、ほとんどがアカアシミツユビカモメで構成されるカモメ類の群が東から西へとすっ飛んでおり、我々の眠気もすっ飛んでいきました。シルエットや飛び方はアカアシミツユビカモメとミツユビカモメで類似していましたが、幼鳥については、内側初列風切羽と次列風切羽にかけて三角形の白色部があり遠くからでもよく目立ちました(図3)。成鳥はミツユビカモメと比較すると、上面の灰色が濃く翼後縁の白帯が目立ち、オオセグロカモメのようなパターンに見えました。宗谷岬の駐車場では到着時に数十分間滞在しましたが、常に帯状にミツユビカモメ類が流れており、アカアシミツユビカモメのみに絞っても数千羽は流れていたのではないかと考えています。



図2 2022年11月13日の主な観察場所



図3 アカアシミツユビカモメ幼鳥? 矢印部分の初列風切と次列風切にかけて三角形の白色部があり、アカアシシギの飛翔時のように目立った。

その後、宗谷漁港に移動すると、11時頃漁港内にハイイロミツバメ1羽が(図4)入っていましたが、カモメ類はそれほど多くなく、アカアシミツユビカモメは発見できませんでした。

東北東の風のため猿払方面も良いのではないかと思い移動すると、12時半頃の知来別漁港では大量のカモメ類(大半がミツ

ユビカモメ)の中にアカアシミツユビカモメ成鳥1羽(図5)、幼鳥1羽(図6)を見つけることができました。その後宗谷岬方面に戻り、15時ごろに宗谷漁港でアカアシミツユビカモメ幼鳥1羽を観察しました。16時近くなった頃に宗谷岬の駐車場から再度観察しましたが、パラパラとミツユビカモメが流れて来るものの、アカアシミツユビカモメを含む群は引いてしまった後のようでした。



図4 私たちの数メートル手前まで飛ばされてきたハイイロミツバメ



図5 アカアシミツユビカモメ成鳥（左下）。アカアシミツユビカモメはミツユビカモメと比べ、額が丸く、上背が濃い。また、嘴も短い。本種の成鳥は足の赤が鮮明に目立つ。



図6 アカアシミツユビカモメ幼鳥（右）。嘴はほぼ黒く、後頸に明瞭な黒帯がある。この写真ではわかりづらいが、足はオレンジ色であった。

1日アカアシミツユビカモメを一生分以上と言ってもいいくらい見ることができました。この日は一日中東北東の風が18m/秒前後、最大瞬間風速25m/秒以上あり、強風に負けて流されてくるカモメ類がとても多く、アカアシミツユビカモメの観察チャンスも多かったのだと思います。アカアシミツユビカモメは強風下での飛翔にだけしているのか、外洋でも漁港内でもミツユビカモメより少し遠いところにおり、漁港や岸に寄ってきたりしても、風が一瞬間弱くなるとすぐさま沖合に出てしまう印象を受けました。また、道南・胆振周辺の太平洋側では個体数が少ないのか、気象条件が整ってもなかなか見ることが叶わない鳥という印象がありましたが、今回の観察で10~11月下旬の北海道オホーツク海側全

域で気象条件が整えば狙うことのできる種である可能性を感じました。

参考資料

気象庁ホームページ

(https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/10min_a1.php?prec_no=11&block_no=1284&year=2022&month=11&day=13&view=p1
2023/08/31 閲覧)

気象庁ホームページ

(<https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/data/hibiten/2022/2211.pdf>
2023/08/31 閲覧)

Olsen, K.M. & Larsson, H. 2004. Gulls of Europe, Asia and North America. Christopher Helm, London

群れるヒメウ

当会代表 長谷部真

ヒメウは近年国内では天売島と積丹半島の窓岩でのみ繁殖します（天売海鳥研究室未発表、矢萩 2020）。道北の日本海側とオホーツク海側では、一年中見られる数少

ない海鳥の一種ですが、個体数は夏には少なく、秋から春にかけて多くなります（図1、長谷部 2015、長谷部 2019）。冬に増えるのは全道共通で、港内の水域に浮いていたり、潜水して採食していたりする他、雪が積もった岩礁で休んでいることもあります。



図1 海岸や海上で群れるヒメウ

ヒメウは他の海鳥と同様港内に休息しに来ますが、港の岸壁の一段低い場所を好んで利用することがあります。道北日本海側・オホーツク海側・道東の港でねぐら時にヒメウが利用していることは知られていましたが、そのような場所を利用するヒメウを実際に見たのは2010年11月の苫前港でした（図2）。この日は、時折雪が舞う西南西 10m/s 以上の風が吹く冬の嵐の日でした。こんな雪の日は何を思ったのか、僕はわざわざ苫前港まで出かけて行ったようです。11 時前に到着すると、ちょうど

港の真ん中あたりから突き出た岸壁にオオセグロカモメがたくさんいました。その岸壁のちょっとしたでっばりにヒメウが 60 羽くらいびっしりと並んでいました。ヒメウは比較的広い場所を利用するウミウと異なり、崖のごく狭いでっばりに巣を作りますので（長谷部 2022）、休息する際にも同じような環境を好むのかもしれない。稚内港や宗谷港でも同じ環境でヒメウを見かけています。



図2 苫前港の岸壁で休息するヒメウの集団 (2010年11月29日 苫前港)

2016年11月には、猿払村浜鬼志別漁港でもヒメウが集まっていた。この日は朝まで東南東の風 10m/s 以上の風が吹いていましたが、ここに着いた昼過ぎにはすでに風が収まっていた。それでも岸壁の上や消波ブロックに 100 羽以上のヒメウが集まっていた。さらに、2018年2月の鬼志別漁港では、驚くべき光景を目にしました。この日は北東の 10m/s 以上の風が一日中吹く日でした。期待して夕方に行ってみると、港がヒメウで埋め尽くされていました(図3)。ヒメウは岸壁の一段低いでっぱりだけでなく、岸壁の上にもずらりと並んでいて真っ黒に見える部分もありました。水面にもたくさん浮いており、外側の消波ブロックにもびっしりとまっています。僕の当時の野帳には、ヒメウ 1,000 羽+とだけ記載されていました。当時撮影した写真を見ながら改めて個体数を数えてみると、3,170 羽を数えました。港全体の写真を撮影していたわけではない

ので、実際にはもっと多くの個体が飛来していた可能性もあります。ヒメウはこの季節に道北日本海側からオホーツク海側、道東にかけてねぐらとして港を利用するらしく、風以外にもこの時期は朝夕に数は増えるそうです。そうは言ってもこの数は尋常ではないので、浜鬼志別漁港は国内最大のヒメウの集積地ではないでしょうか。10・11月の猿払沖・浜頓別沖で2回実施した海上調査でも平均 168 羽が確認されていますので(長谷部 2019)、オホーツク海側でも秋季に多くの個体数が生息しているものとみられます。消波ブロックなど陸上から見えにくい部分にも一定数いると思われるので、ドローンがあれば上空から正確な個体数を数えることが期待できます。強風時にドローンを安全に飛ばせるかは課題ですが、どのような条件で数が増えるのか興味があるので機会があれば改めて調査したいです。

引用文献

- 長谷部真 2015. 天売航路における海鳥個体数の季節変動、長期変化と分布. 第27回 北海道鳥学セミナー講演要旨集:5.
- 長谷部真 2019. 浜頓別・猿払沖海鳥調査. 北の海鳥 8: 26-36.
- 長谷部真 2022. 天売島のヒメウ繁殖状況. 北の海鳥 15: 10-13.
- 矢萩樹 2020. 窓岩海鳥調査 2019. 北の海鳥 10: 8-10.



岸壁上に隙間なく並ぶヒメウ 2018年2月5日



消波ブロック面にとまるヒメウ 2018年2月5日

図3 猿払村浜鬼志別漁港に集結したヒメウ

釧路市における海鳥類の観察記録④
アジサシ類・トウゾクカモメ類・ウミスズメ類

当会広報 矢萩 樹

はじめに

筆者は、大学在学中の2013～2017年までの間を釧路市で過ごし、市内の各所で海鳥を観察しました。これらの記録を整理し、前号までに海ガモ類～カモメ類の観察記録について報告しました。本稿では、前号までの続編として、アジサシ類・トウゾクカモメ類・ウミスズメ類の観察記録をまとめたいと思います。

観察記録

2013年～2017年までの観察で、アジサシ類1種、トウゾクカモメ類1種、ウミスズメ類5種が記録されました(表1、図1)。いずれの種も釧路市内での繁殖は確認されませんでした。

ただし、繁殖期にウミスズメとウトウが記録されました。ウトウについては、最寄りの大黒島やケンボッキ小島等で繁殖する個体群が釧路市沿岸を繁殖期の採餌海域として利用している可能性が考えられます。ウミスズメについては、一部の個体が越夏しているか、道東に未知の繁殖地があるのかもしれない。その他の種は、国内での繁殖状況や本観察記録での確認時期を踏まえると、渡りや越冬のために渡来していると考えられます。

表1. 釧路市における海鳥類の月別の観察記録(2013～2017年)

| 種名 | 月 | | | | | | | | | | | |
|--|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| アジサシ <i>Sterna hirundo</i> | | | | | ● | ● | | | | | | |
| トウゾクカモメ <i>Stercorarius pomarinus</i> | | | | | ● | | | | | | | |
| ハシトウミガラス <i>Uria lomvia</i> | | | | | | | | | | | | ● |
| ウミガラス <i>U. aalge</i> | | | | ● | | | | | | | | |
| ケイマフリ <i>Cephus carbo</i> | | ● | | | | | | | | | | |
| ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i> | | | ● | | | ● | | ● | ● | | | |
| ウトウ <i>Cerorhinca monocerata</i> | | | | | | ● | | ● | | | | |
| 計7種 | 0種 | 1種 | 1種 | 1種 | 2種 | 3種 | 0種 | 2種 | 1種 | 0種 | 0種 | 1種 |



図 1. 観察種的主要な確認場所

アジサシ *Sterna hirundo*

2014年5月及び6月にいずれも釧路港で観察されました。2014年5月には、30個体の群れが釧路港内で観察され、集団で水中にダイビングする採餌行動が見られました。観察頻度は高くなく、海岸部では渡り時期に一時的に通過すると思われる。



アジサシ (2014/6/12 釧路港)
トウゾクカモメ *Stercorarius pomarinus*

2014年5月に釧路港で1個体が観察されました。観察個体は、スプーン型の中央尾羽を持つ成鳥でした。十勝沖、霧多布沖、根室海峡では、秋期(9月・10月)に個体数が最も多く、釧路町の尻羽岬や浜中町の霧多布岬では、5月後半から6月上旬にも次々と渡る本種が観察されています(千嶋 2018)。これらの時期には釧路沖でも普通に分布すると思われるが、筆者が観察したのはこの記録のみでした。

ハシブトウミガラス *Uria lomvia*

2014年12月に釧路川で観察されました。また、2017年2月には釧路川で本種の死体が2個体確認されました。確認場所が漁船の停泊場所であったこと、遠目から見る限り目立った外傷が認められなかったこと、同所的に外傷のない他の海鳥の死体が複数見られたことなどから、混獲個体が

投棄された可能性が考えられました。混獲個体であれば、本種がこの時期の釧路近海に生息していることを示唆しています。↘



ハシブトウミガラス
(2014/12/28 釧路川)



ハシブトウミガラス死体
(2017/2/8 釧路川)

ウミガラス *U. aalge*

2015年4月に桂恋の沖合海上で1個体が観察されました。本種はハシブトウミガラスよりも岸近くで見られる傾向があり、漁港にも入るとされますが(千嶋2013)、筆者が観察したのはこの記録のみでした。

ケイマフリ *Cepphus carbo*

2015年2月に釧路港で観察されました。観察個体は、スズガモとクロガモの混群中で見られました。また、2017年2月には、足が赤く、下面の広範囲が白色で、周囲で観察されたオオセグロカモメとの相対的な体サイズの違いから、本種の可能性のあるウミバト属の死体が1個体確認され、混獲個体と考えられました(③ハシブトウ

ミガラスの記載参照)。釧路沿岸は、本種の越冬海域として利用されている可能性が考えられます。



ケイマフリ (2015/2/11 釧路港)



ウミバト属死体 (2017/2/8 釧路港)

ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus*

春季から秋季に釧路港、千代ノ浦及び桂恋沖で観察されました。2015年には、本種の繁殖期と推定される6月25日に、桂恋の沖合海上で2個体が観察されました。道東太平洋側における本種の繁殖記録は、1987年のハボマイモシリ島での記録(佐藤1998)に限られます。釧路沿岸では、一部の個体が越夏しているか、あるいは未知の繁殖地があるのかもしれませんが。

なお、根室市のチトモシリ島では、繁殖記録はありませんが、繁殖期の夜間に島周辺の海上から鳴き声が確認された報告があります(NPO 法人エトピリカ基金2013)。道内における本種の繁殖状況については、さらなる調査が必要と思われます。



ウミスズメ (2015/3/9 釧路港)

ウトウ *Cerorhinca monocerata*

6月及び8月に千代ノ浦、紫雲台沖、桂恋沖で観察されました。2014年6月には紫雲台沖で50羽の採餌群が観察されました。また、2014年8月には、千代ノ浦で当年生まれの幼鳥が観察されました。道東太平洋側における本種の繁殖は、大黒島、ユルリ島、モユルリ島、友知島、チトモシリ島から記録があります(環境省 online)。釧路沿岸は、これらの繁殖地で繁殖する個体群の採餌海域として利用されている可能性が考えられます。

・『北の海鳥』編集後記

今回は久しぶりに伊藤元裕さんに青森のウトウについての記事を書いてもらいました。東洋大学へ赴任されてからどうしているかわからなかったのですが、今回の記事により青森でウトウの調査を続けていることがわかり嬉しく思いました。

大門さんからは大黒島のケイマフリ繁殖可能性の貴重な報告です。ウトウ調査の合間に得られた貴重な情報です。

三ツ橋さんは初めて本会報誌に投稿していただきました。冬の嵐の宗谷岬には海鳥が避難しており、普段観察が難しい海鳥を

おわりに

本稿を含めて全4回にわたり、釧路市における海鳥の観察記録をご紹介しました。大学4年間で多くの海鳥を観察する機会に恵まれました。また新たな場所で魅力的な海鳥観察を続けたいと思います。

引用文献

- 千嶋淳(2013)北海道の海鳥1 ウミスズメ類①.NPO 法人日本野鳥の会十勝支部, 帯広.
- 千嶋淳(2018)北海道の海鳥5 トウソクカモメ類・アジサシ類. 道東鳥類研究所, 池田.
- 環境省 (online) 海鳥コロニーデータベース
<https://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/>. 参照日: 2023年9月3日.
- NPO 法人エトピリカ基金(2013)北海道東部における海鳥繁殖地の保全活動. 平成24年度(第27回)タカラ・ハーモニストファンド活動助成報告.
- 佐藤文男(1988)北海道ハボマイモシリ島調査報告. 日本鳥類標識協会誌 3: 20-21.

見られるという貴重な内容でした。今後ぜひ他の地域の海鳥の状況についてご寄稿いただければと思います。

先崎さんからは季節と地域を選べば十分に観察する機会があるというコシジロアジサシの話でした。ずっと前に勇払クルーズで観察したのを思い出しました。日本野鳥の会の調査で過去に猿払沖の海鳥調査を実施したのですが(北の海鳥8号参照)、海鳥がほとんどいなくなる日本海の感覚で、オホーツク海のコシジロアジサシ調査適期である8-9月に実施しなかったことが悔

やまれます。

長谷部からは港に集まるヒメウの話でした。ヒメウは嵐の日に集まるものと思っていましたが、冬に日常的にねぐらとして港を使っていることを初めて知りました。

矢萩さんからは「釧路の海鳥」の最終回でした。釧路周辺で多くの海鳥が生息することが明らかになりました。彼が学生の時に収集した情報がこうして発表されることは素晴らしいです。次回からは新たな「連載」が始まることを期待します。

北の海鳥 17号は2023年の秋に発行する予定でしたが、冬にまで遅れたことをお詫びします。会報誌の次号は2024年の2

月頃に予定通り発行したいので、執筆者の皆様は時間がないですが、次号の原稿をよろしくお願ひします。ご連絡は長谷部までお願ひします。

hasebemakoto@hotmail.com

北海道海鳥保全研究会は現在ほぼ会報誌の発行だけが活動となっています。「北の海鳥」は私、長谷部と事務局長の先崎さん、広報担当の矢萩さんの3名で運営しています。原稿の細かい部分まで確認していますがよりよい会報誌にするためですので、面倒をおかけしますがご理解の程よろしくお願ひします。

| |
|--|
| 北海道海鳥保全研究会 編 会報誌 北の海鳥第十七号 発行日 令和5年12月20日 発行所 北海道稚内市5-27-8 |
|--|